

パネルディスカッション

探究的な学びから研究へ

[パネリスト] 山田 剛史 (関西大学 教育推進部 教授)

[パネリスト] 岡田 厚志 (兵庫県立村岡高等学校 教頭)

[パネリスト] 多々納 智 (京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校 教諭)

[コーディネーター] 滋野 哲秀 (大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター/龍谷大学 文学部 教授)

滋野: それでは、早速、パネルディスカッションに入りたいと思います。

パネルディスカッションでは、まず、山田先生から、2校の発表につきましてコメントをいただきます。その後、基調講演に関しまして、ご質問がございましたので、山田先生に答えていただきます。村岡高校、宮津高校・宮津天橋高校に関しまして、皆さまからお寄せいただいた質問を、幾つか整理させていただきましたので、2つの高校の取り組みから回答をいただく流れで進めたいと思います。最後の残りの時間でまとめと、3名の方から一言ずつメッセージをいただいて、このパネルディスカッションの時間を終了したいと思います。

それでは、まず、2校の発表につきまして、山田先生からコメントをいただけたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。

山田: よろしく申し上げます。まずは、全く打ち合わせをしていないのですが、どこも全て「主体性」が共通のキーワードとして入ってまして、その時点で、つながっていると非常にうれしく思いました。それぞれの目指すベクトルが合っていることが感じられたのが、非常に良かったです。

やはり2校とも、取り組みの背景には、学校の存続の危機、子どもの数の減少、統廃合等が

あり、それなりの覚悟があったとは思いますが、その危機を危機のままにせずに、どのようにすればチャンスに変えられるかと、先生たちが立ち上がって、地域に開いて、つくり上げてきたことに敬意を表したいです。なかなかできていない皆さんからすると、どのようにしたらここまでいけるのだろうかというのが素朴な疑問としてあると思います。さらりと話されていますが、保護者の理解、地域や先生方の理解など、非常に大変なご苦労があったと聞きながら感じました。

細かい話は、この後のディスカッションでできればと思います。

滋野: ありがとうございます。

それでは、山田先生にお寄せいただいた質問の中に、先ほど、お答えできなかった部分が2つありますので、回答いただければと思います。1つは、大学の初年次教育で探究型科目を導入するにあたり、テーマ設定などの工夫や注意点を伺いたいという質問ですが、いかがでしょうか。

山田: 先ほど、少しお伝えしたかと思うのですが、今日のお二方の発表を見ても、テーマ設定はとても大事です。どの程度の線でこちらが提供するのか、自由度をどのくらいにするのか

は考えものだと思います。大学にもよりますが、初年次で実施する場合は、何でもよいでも構わなくて、僕も割とそのような方法をしてきたのですが、学生が乗りやすいのは、決めてしまわない、自由にさせ過ぎない、幾つかテーマの大枠を示して、その中で自分がフィットしそうなところを選んで、細かなテーマを決めていく。そうではなく、自由なところから始めると、テーマ設定だけで何週も取ってしまうことになるので、場合によっては、その中で5つくらいキーワードを示してから選ぶのもよいかと思います。目的によっても、いろいろ違うかと思いますが、今のところ、私の落ち着きどころとしては、そのようなところかと思っています。



滋野： ありがとうございます。どちらかというと高校の内容になるかも分かりませんが、イベント的になってしまう危険性があるようにも思います。このような危険性を回避するためのご助言をいただければという質問なのですが、いかがでしょうか。

山田： 幾つか考え方があってと思うのですが、1つは、イベント的でもよいのではないということ。いきなり全学展開、全校展開というのは厳しいと思うので、まずパイロット的に行ってみて、イベント的なところからでも、きちんと生徒たちの反応を見て、アセスメントもして、なかなかよい、というところを少しずつ増やして、次にこちらでしようかというように広げて

いくのが1つ。

もう一つは、今年3月に学校教育法の施行規則改正で、高校において「スクール・ミッション」「スクール・ポリシー」の策定公表が求められるという話が出ています。これは、大学で言えば「ディプロマ・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」という3つのポリシーがあって、それが、高校に下りてきたという話です。おそらく皆さんも存じ上げていると思うのですが、改めて言うと、スクール・ポリシーの中には「育成を目指す資質・能力」「教育課程の編成・実施」「入学者の受け入れ」の3つがあります。要するに、高校を出るときに、どのような力を持った子を育てたいのかを、はっきりさせましょうというのが、この最初の「育成を目指す資質・能力」です。そのために、どのような教育課程の編成を実施するのかというのが、真ん中のカリキュラムの部分です。どのような子どもたちを受け入れたいのかに関する方針、この3つをつくってという話が出ています。

今日の2校のポイントもそうなのですが、まず「探究」をイベント的にさせないためには、そもそも、その学校でどのような子を育てたいのかをきちんと定義することだろうと思います。2校ともその議論があって、先ほどの宮津高校・宮津天橋高校でもありました「自立」したり「REALISE!」であったりなどの目標があって、それを実現するためには何が必要か。そのために探究も必要です。しかし、通常の教科教育の中でもこれがきちんと身に付けられるようになるためには、やはり、アクティブラーニングを入れないとならない。それぞれの科目を、もう一度、目標に照らし合わせて位置付けていく作業をすることによって全体に広げていくという方向性が、今、求められているのだろうと思います。このように少しずつ草の根的に広げていく方法、または、スクール・ミッション、スクール・ポリシーに合わせて各教科の位置付

けを再構成していく方法、この2つで広げていくということなのでしょう。

滋野： ありがとうございます。今、2つ目の質問について、山田先生から育てるべき生徒像をみんなで共有するというコメントがありましたが、お二人の高校の取り組みから、簡単にコメントをいただければと思います。

岡田： 報告の中でも少し話をさせていただいたのですが、本校は、過疎・少子化が進んでおりまして、生徒がいない、子どもがいない地域です。近隣の中学生全員が本校に来ても定員を割ってしまうのです。その上、上位層は近くの進学校に流れるということがありますので、近隣の進学校と本校で、大学進学率、または国公立の数を競争できるかといった議論があったようです。そのような中で、高校がなくなったら地域もなくなる、そこを守るのは高校ではないか、若者ではないかと展開して、地域との協働の中で若者を育てる、力を育てる、地域づくりのリーダーをつくるという考え方で、学校の中が統一しているところはあるかと思います。

滋野： 宮津高校・宮津天橋高校はいかがでしょう。

多々納： 本校では、事例報告でも述べさせていただきましたが、探究の立ち上げに先だって、教員研修で目線を合わせることをしました。やはり進学を期待されているので、従来の偏差値教育は避けては通れないところがあったのですが、それが学びの楽しさにつながっていないところが非常に問題だったのです。山田先生からもありましたが、まさに、そこからどのように脱却するかということから「安心と愉しさを」というワードを立ち上げました。安心というのは、一定の学力、上級学校に行っても通用する力は確実に担保します、ということです。その

手だてに探究をきちんと位置付けていくことです。当初、従来の授業から幾らか単位数が削られることにもなるという時点で、ただ単に減るのではなく発展的だと、ある一定の目線合わせができていたと思います。そのため、今、全校体制でできているのだらうと思っています。

滋野： ありがとうございます。

事例報告に関しまして、皆さまから出された質問を幾つかまとめてみました。今回のフォーラムが「高校の探究から大学の研究へ」というテーマでもありますので、進路に絡んだところについても後で触れて、皆さんと一緒に協議しようと思うのですが、まず、高等学校の分掌組織体制、校内運営です。両校ともに公立高校です。当然、転任されてくる先生がおられる中で、特定の教員に負担がかかることなく、全ての教員が探究を指導できるようになっていくためには、どのようにすればよいのかということに、1つ目の焦点が絞られるかと思えます。

私も、幾つかの学校で伴走していますと、義務教育の学校でも高校でも、校内組織の体制で同じような課題が出てきます。先ほど、紹介していただいた「探究推進部」があるなどの部分は省略していただいて、どの部分に関わってもよいので、学校の中で工夫された点がありましたら、村岡高校から順にお話しいただけますでしょうか。

岡田： 組織については、全校職員で組織をつくっています。校内運営につきましても、できるだけ無理のかからないように、得意分野を指導するということがポイントです。報告の中にも、総合的な探究の時間は8つのグループで縦割りにするとありましたが、この基本は、部活動の単位で縦割りにします。民芸班はスキー部とバレー部の顧問が就き、指導します。不特定多数で集まるよりも、そのように部活動の単位

で行う方が、生徒は動きやすいのです。土日も活動しますので、部活動の日程を考慮しやすいのです。そのようなこともあって、縦割りにしています。3年生が指導する、2年生が引き継ぐ、1年生は覚えるという役割で活動を進めています。

例えば「環境B班」が森林を探求する場合には、そこには計算等が入ってきますから、数学の先生に担当してもらおう。一人の数学の先生が変わって、次の先生が入って、そこでまたコミュニケーションが生まれて、引き継ぎもできるだろうなど、できるだけ無理のない班を持つ、先生がいなくても3年生が指導できる体制をつくらうということから、今の形になったと聞いています。

今、元締めの方がいます。教育コーディネーターである地域おこし協力隊が、この3月で任期が終わって、10月まで不在でした。10月に新しい人に来てもらったのですが、その間は大変でした。通常は地域おこし協力隊が、教育コーディネーターとして手となり足となり動いていただいているのが本校の体制の特徴です。その先生は、みんなを巻き込むよう声を掛けています。みんなで分担してできているということなのです。

それから、学校設定教科「地域探求」では、大学の先生に入っていただくのですが、職員を、1年生団、2年生団というように3つの大きな学年団に分けています。その先生たちが分担してTTを行っています。そのため、班別活動やフィールドワークなど、その時の授業の形態において柔軟に担当者や人数を配置します。できるだけ負担が最小限になるように行っています。

滋野： 転任の先生たちは、初めに何か特別にガイダンスなどを受けられますか。

岡田： 全員で、一緒に動いて覚えていくとい

う流れで行っています。大まかに説明はしますが、細かいことまでは言わずに、一緒に動こうということです。

滋野： ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校は、いかがですか。

多々納： まず、本校では、1年生もそうなのですが、2年生の普通科の各クラスの中に組織があり、3人の「探究委員」がいます。私が生徒たちに指示を送ると、それを各クラスで流し、何か現状と指示が合っていないところがあると、その委員から話が上がってくるというように、基本は探究委員を中心に回しています。

すでに名前を出している探究推進部では、二人分掌で、私は常に定点観測をしているのですが、あと一人が1年生の担任に翌年入って、1年生の探究の担当をして実働部隊として行う。そして、新たな教員を探究推進部に迎え入れて、勉強してもらおう。校内人事が、偶然このような巡りになっています。

本校にはコーディネーターがおりません。私が地域活動をする「フィールド探究部」という部活動をしなが、地域の人とのコネクションをつくっています。それが特定の教員の負担になっていると言われると、私は、自由に丹後を駆け回らせていただいて、ライフワーク化していて、どちらかというとそれが好きなので、良しとしています。

滋野： ありがとうございます。今、校内の体制について、お二人の先生からお話しいただいたのですが、この組織体制づくりについて、山田先生が入られている学校のことも含めて、何かアドバイスがありますでしょうか。

山田： 先ほど、僕にいただいた質問とも関係すると思いますし、おそらく、2校ともそうですが、いかに混ぜるかが大事だと思うのです。

どうしても先生は教科の縦割りやクラスがあって、良くも悪くも、自分のクラスや自分の教科の責任を持っています。そこをどのようにして違う教科や違う学年の先生と、探究という教科を超えたチームをつくり、緩やかに連携していくのかですが、2校とも自然にそうなっている。今、合教科とも言いますが、これからはそのように教科に縛られずに、先生たち自身が混ざっていくことがとても大事なだろうと改めて思いました。

東山高校でも授業公開研究会を定期的に行っているのですが、そのときも、教科の違う3人の先生でチームを組んでいます。例えば、国語の授業を、理科と英語の先生がTTのようにサポートに入って、1つの授業をつくるなどです。いかに先生方が柔軟に、自由に動いて生徒たちの学びに関わるか、探究が学校の組織文化に与える影響は非常に大きいと思うのです。ここで風穴を開けるきっかけになっているのではないか、そのようなものが出てくると、普通の教科の中でも自然にそのようなことが議論されるようになって、非常に透明感のある学校になる。他のクラスだが、他の先生がその子に指導するような形がとても良いのではないかと思います。



滋野： ありがとうございます。1つのものを取り組む中で、みんなが同じものを共有している、共通の話題ができることが非常に大きいのでしょうか。村岡高校と宮津高校・宮津天橋高

校の場合では、その辺りはいかがでしょうか。

岡田： 私が実際に生徒と接して、という場面は少ないのですが、先生方の動きを見てみると、先生方も楽しんでます。それをきっかけに、生徒以上に地域に愛着を持ってくれる先生もいますし、休みの日には、廃村を巡って「こんな課題がありますよ」と私たちに言ってくれる先生もいます。フィールドワーク等の時間が足らず、時間外に動いてくれることもあるのですが、嫌がらずに楽しそうに活動してくれていますが、私たちの立場としては、先生も楽しんでくれている体制をつくっていかないとならないと、日ごろから感じているところです。

滋野： ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校は、いかがでしょうか。

多々納： 本校でも、特に、2年生の探究は16名の先生方に当たってもらっていますが、本校は地域に限定しているわけではないので、今年から、とにかく外で誰かとつながってください、何かしら情報を得て、生徒たちに還元してくださいというようにトライしています。基本的に、学校の組織の中では、役職のない教員は部活動の関係での他校との連絡くらいしか外部とつながることがないのです。しかし、新たなことを得て、良い刺激をもらっていると言っている先生もいます。1年生で地域の課題を探そうというのも、今までそこに目を向けていなかった教員が多かったからで、今では地域への気付きにつながっていると思います。われわれ教員にとっても、本当に有意義な活動と思っているところです。

滋野： ありがとうございます。

村岡高校の報告への質問ではありますが、おそらく宮津高校・宮津天橋高校も同じで、コーディネーターがおられる、おられないはあると

は思うのですが、地域の人との人脈づくりについては、いかがでしょうか。

それから、村岡高校のみへの質問なのですが、上級生と縦割り組織をつくる時の工夫を併せてお答えいただけたらと思います。



岡田： 人脈づくりですが、これも無理のないようにということです。初めにスタートしたときには、フットワークの軽い方や若者と連携したというように聞いています。その当時、地域おこしの若者懇談会という会が存在していて、その人たちに声を掛けて、その中に棚田の保全をしている若者がいた。地域の活性化をしている人たちが町の役場の職員であったなど、そのようなところから少しずつ広がっています。

それから、鳥取大学とのつながりです。初めにも言いましたが、生活圏が鳥取なので、鳥取からも、本校に来やすい状況にあるのです。鳥取大学が、まず香美町に依頼されて、地域の集落調査をされていました。高校生も手伝いますよ、というところから集落調査が始まりました。まず手の届くところから、また、相手としてはフットワークの軽い方から、少しずつ範囲が広がって、今のような形になっている。環境班でも、初めはごみ拾いから始まったと言われていきます。しかし、ごみ拾いだけでは駄目だろう、次に何をしようかというような展開をしていきました。

滋野： 上級生との縦割り組織では、何か工夫

をされていますか。

岡田： 部活動の単位、それが、顧問も生徒も負担が軽く、活動もしやすいということです。

滋野： ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校からも、大学も含めた、人脈づくりのお話をしていただけませんか。

多々納： まず、人脈づくりについては、私の報告の中で、巨木の調査でマッピングしたのを見せましたが、丹後の村という村は全て回りましたので、そのようなところで出会って、お話しいただいた面白い方を私がとにかく捕まえました。それから、当初、何をしたらよいか分からなかったときに、当時の管理職に勧めてもらった「京都府立丹後海と星の見える丘公園」で出会った方々が好意的にハブになって、いろいろつなげてもらって、今もその広がりが続いているのです。新たな出会いがたくさんあって、私は楽しいと思っていますところです。

大学の方々とのコネクションに関しては、まずお隣にいらっしゃる滋野先生が、本校の探究に最初に注目して来ていただいて、ご専門である地学で、風に関するアドバイスをもらったり、丹後海と星の見える丘公園で、偶然出会った京都教育大学の先生をがっちりキープしたりというところですか。杉岡先生は、昨日も会いまして、おそらく、あさっても会うのですが、偶然ご一緒させていただく機会が多いので、いかがですかと、すぐに声を掛け、巻き込ませていただいています。

滋野： ありがとうございます。村岡高校では、鳥取大学と長い間続いているということですが、その秘訣は何かありますでしょうか。

岡田： 秘訣ということはないのですが、やはり3年ずつの担当制でしていただいているの

が、よい流れになっているのではないかと思うのです。今、2サイクル目の先生もおられます。足かけ6年、継続して学年を見ていただいています。大学の先生も異動がありますから、そのときにはキーになっている筒井先生と連絡を取りながら次の担当者を決めてもらいます。そのような方が大学におられることが、本校としてはとてもありがたいですし、そのようなところが続いている理由かと思えます。

滋野： ありがとうございます。村岡高校への質問になるのですが、全国から入学してきた生徒と地元の中学校から進学してきた生徒の温度差やモチベーションについて、特に工夫されている点はありますか。

岡田： 兵庫県の北部以外から来ている生徒は、現在はアウトドアスポーツ系です。中学校のときと環境を変えたいと思って来る生徒もたくさんいます。もちろん、地元には自然やいろいろなアウトドア施設がありますから、アウトドアスポーツに関心を持って来る生徒もいますが、一概にそのような生徒ばかりではないのが現状です。そのため、モチベーションが違う生徒もいますが、学校の風土や地域の温かさなどといった他校に負けないような雰囲気がありますし、地域イベントのマラソン大会でいろいろな人に声を掛けてもらうなど、地域の人と触れ合う機会の中で生徒たちは変わっていきます。

香美町が何を求めるかといったら、移住定住です。しかし、本校の狙い、私たちの考えは、その子が自分の地域に戻って、そこで活性化するリーダーになってくれる生徒をつくりたいというところがありますので、そこまで残れとは言いません。ステージの上でプレゼンテーションをしている生徒の姿を見ると、本校での取り組みは間違っていないのではないかと感じます。小規模ですので、役割がきちんと全員に

与えられます。卒業するときには、多くの生徒から入学して良かったという声を聞くことができます。

滋野： ありがとうございます。

山田先生、大学と連携して探究活動を進めていくことに関して、お互いにウィンウィンの関係がないとならないと思うのですが、大学の教員から見たメリットはいかがですか。

山田： 少し気になるのは、大学と連携しているのかということです。大学の先生に協力を仰いでいるという話と、学校の場合は学校が主語だと思うのですが、本当の意味で大学と連携と言ってよいのかという話がまずあるのです。本来は、難しいのでしょうか。どうしてもそういうのが好きな先生とのコネクションができ、それがきっかけになってというように、偶然そのような知り合いやコネクションがあればつながることはできるが、それは属人的なところがあるので、つながれない。さらに言うと、僕も皆さんもそうですが、捕まえられる人はすでに捕まえられていて、そのようなことに興味のある大学の先生自体がどこにいるのだろうというように、先に手を付けた方が勝ちになっている印象もある。正直に言うと、大学の人たちが、高校のこのような取り組みを一緒になってしようという気運が高まっているかということ、おそらく全体としては、今はまだ、受け入れた学生の初年次教育や学修指導など、多様化している学生の問題にどのように向き合うのかで手いっぱいというところがあり、少し課題かと思っています。

滋野： ありがとうございます。

このフォーラムの大事な趣旨でもある、大学との接続を考えれば、卒業生の進路選択はどのようなのかという質問がありました。少しお話しいただいた例もありますが、村岡高校、宮津高校・

宮津天橋高校の生徒の進路選択はいかがでしょうか。

岡田： 本校の現状として、他校と進学で競り合うのは、なかなか厳しい状況からスタートして、どのように特色を出して進学に生かしているかというところです。実際、数字で言えば、英語コースやユニバーサルコースの類型がスタートしたときには、国公立が数名でしたが、地域との探求活動を始めてからは、7～8名くらいまで上昇したので、成果だと思います。目標としては、各学年の20%という声も上がっていたようですが、コロナがあって、少し厳しかったりします。

また、近年、各校が探究活動を始めていますので、今までと同じような進学指導ではなかなか難しくなりました。本校の受験は、総合型選抜が中心でした。探求活動とプラスして、本校は学校設定教科で「スピーチ」という授業を行っています。2単位で、1つはプレゼンテーション能力向上。もう一つは「夢ゼミ」といって、自分の将来、キャリアについて考えます。それから、小規模校ですから、個別の指導をしながら、進路に向けての取り組みをします。今までは、そのようなことで走ってきたが、新しい教育課程になって、学習指導要領が始まって、進路指導を含めてどのようにするかというのは、今の本校の課題でもあり、議論しているところです。

滋野： 卒業論文を進学に利用されることについて具体的に教えてほしいという質問がありましたので、簡単に教えてください。

岡田： 夏休みに、第1回目の原稿の締め切りを迎えます。それは、2学期に総合型選抜が始まるからです。3年間の自分の取り組みをきちんと整理して、まとめる機会をそこで作りまします。生徒一人に教員が担当で付いて、その卒業

論文を磨いていきます。自分の3年間のまとめをして、その生徒に自分の探求の柱を植え付けていくのです。そして、進路に向けての取り組みをしていく。最終的な発行は3月なのですが、大きな筋は2学期で作り上げているという経過で取り組んでいます。

滋野： ありがとうございます。では、宮津高校・宮津天橋高校の卒業生の進路選択という観点からはいかがでしょうか。

多々納： この報告の資料作成には間に合わなかったのですが、つい最近合格発表がありました。幸い、総合型選抜で出願をしていた者がみんな丸をもらいました。しかも、探究のことをネタにして、きちんと評価をいただいたので、私は、担当者として、ほっと胸をなで下ろしているところです。やはり行ってきたことをきちんと面接や志望理由書で書いて、具体的な何かがあるところが全く違うかと思っています。

私の報告に対する質問の中に、志望が変わった生徒の、その志望の変更は良かったのかというご質問がありました。果たして、それが良かったか悪かったかは、今、その子が判断できるかといったらそうでもなく、私が判断するわけでもなく、ただ、現時点で言えるのは、それによって前向きな気持ちで学校生活を送れて、勉学に励めたことが全てではないかと思います。そして、そこから大学に進むので、大学での学修・研究にもおそらく前向きに臨むだろうと思います。現時点で、そこまでで正解と言ってよいのか、また、その先は分からないところがあります。

これは村岡高校も同じだと思うのですが、大学や専門学校など、とにかく一度出るので。探究を立ち上げて本校はそれほど時間が経っていませんので、出た後に戻ってくるかどうかという結果が出たというものがないのですが、私が見てきたフィールド探究部の生徒たちは、

心は丹後に置いていっています。どのような形かは分からないが、帰るかもしれないし、帰らなかったとしても、丹後のことを何か応援できるようにしたいと言ってくれるのは、とても心強いと思っています。



滋野： ありがとうございます。山田先生、初めの基調講演でもお話はされたのですが、大学に入学してくる学生という観点から考えると、このような取り組みをして大学に入ってきた学生はいかがですか。

山田： やはり、いろいろな形で明らかに違いが出てきています。例えば、グループディスカッションやプレゼンテーションをすることになったときに、数年前だと「どうやったらいいんですか？」のように、みんながちがちになっていたのが、本当にスムーズにしている。これは、ほとんどの大学人が経験していると思います。一方で、みんなタブレットなので、パソコンのキーボードが打てないなど、逆に使えないものがかなり出てきました。

進路について、僕が最後に投げ掛けて終わりたいと思います。校内で探究がなかなか広がらない、さらに言えばアクティブラーニングが広がらないのです。僕も5～6年前から中高に関わるようになって、一番多く受けた質問が「それをやって、進学実績にプラスなのですか？」です。従来の学力的な形でのラインに邪魔になるものではないか、教科書が終わらないのでは

ないかという話が以前からあって、学校の中でなかなか広がらない。そこを熱量で、属人的に突破口を見つけて行っているところと、従来型の方法で、どこどこ大学に何人合格というアドバルーンを掲げること自体がその文化をつくっているところがあるので、少し暴論過ぎるのですが、やめた方がよいのではないかと個人的には思うのです。そうではなくて、その子自身ができることのできるための選択をしてもらい、そのマッチング率100%を目指すと、非常に幸せな高大連携だと思いました。勉強ができる子、できない子ではなくて、したいことを探究するための大学の選択につながるようになっていくとよいと思いました。

滋野： ありがとうございます。村岡高校では、地元に戻ってくるのを期待しつつ、それぞれが生きていく場でどれだけ頑張っていく子に育てるかとおっしゃっていましたが、探究活動をつくっていかれる中で、そこから育てたい生徒像や学校像など、何か一つ最後にメッセージとしてお話しただけたらと思います。

岡田： もちろん、地元に残って、地元の活性化をしてくれるのが最大の夢ですし、目的です。そのような中、本校はキャリア教育で、地元の活性を意識した指導をしています。その取り組みの中で、それをベースにしながら生徒は進路を考えています。例えば、美容師になるために専門学校に行って、都会で美容室をするが、お盆に帰ってきたら、地域のおじいちゃん・おばあちゃんの散髪をしてあげたいというような意識を持ちながら進路を選択していくのは、本校独自のキャリア教育ができていっているのかと思います。

本校の近くに廃校になった高等学校もありますし、その地域が今どのような姿になっているかを地域の方が目の当たりにされています。私たちも、それを見ています。そのような中で、

地域と行政が今以上にきちんと連携を取らないといけないと感じています。学校だけでは無理ですし、人だけでも無理なので、それを1つの線や面にして、さらに地元で活躍できる、または地域を意識して、将来、自分の課題・生き方を探し求めてくれるような生徒を、これから一人でもたくさんつくっていきたいと思っています。

村岡高校のみでは無理なので、今日、見ていただいている方や、今日、お知り合いになった方などと、さらにコミュニケーションを取って、連携をさらに広げていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。ありがとうございます。

滋野： では、宮津高校・宮津天橋高校の多々納先生、お願いします。

多々納： 僕がそうであったように、学校と家の行き来になってしまうと、生徒の可能性は狭まると思うのです。それを打開するために地域というものが存在すると思いますし、それは教員ももちろんそうなのです。つまり、学校の教育活動は教育全体のうちの一場面に過ぎなくて、先ほど、岡田先生からもありましたが、地域や行政の力などが一体となって、生徒の成長を後押しできるのが一番よいのかと思います。私は、今の担当をする前の自分よりも、今の自分の方がよほどハッピーな人生を送れていると思っています。とても楽しいですし、これからも頑張ろうと思っています。

滋野： ありがとうございます。

最後に、宮津高校・宮津天橋高校への質問の中で、都会でも同じように地域に根差した探究活動は可能でしょうかという質問がありました。村岡高校も宮津高校・宮津天橋高校も、どちらかという人口減少が進む地域の事例報告となりましたので、山田先生、これに答えて

いただいたら探究活動全体のことになるかと思いますが、いかがでしょうか。

山田： 「地方だからいいよね」「資源がいっぱいあるからいいよね」というのは、僕よりも先生の方が言われると思います。もちろん、リソースの違いはあると思いますが、歴史や環境など、いろいろな問題はむしろ都市部の方が山積みになっている部分もあります。テーマは変わるかもしれませんが、課題の立て方はあるのではないですか。ただ、早くしないと、学校が密集しているところは取り合いになるかもしれないという問題はあるかもしれませんが、十分に可能だと思います。

滋野： ありがとうございます。山田先生に、最後に一言まとめていただいて、終わりにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

山田： 僕は50分もつかなと思っていたのですが、あと1時間くらい話したいです。本当にたくさんあって、大学のことも、さらにお伝えしたい。少し思い出したのは、京都大学の教育学部の特色入試の子たちが、グループで調査活動をしているときに、リーダーシップを取っている子たちはみんな特色の子たちでしたという事例がありました。ただ単にプレゼンが上手というわけではなくて、グループの中でリーダーシップを発揮してくれている子たちがほとんど探究を経験している、それがとても印象に残っているエピソードだとお伝えしたかったのです。

しかし、それを冷めて見る子たちも出始めていて、自分が浮いているように感じて、遠慮するようになっていく。つまり、まだまだ、その人たちが前に出てもよいという雰囲気が出ていない状況もあるので、やはりいろいろな学校がこのようなチャレンジをしていくと、よりそのようなところに臆せずにチャレンジして、

リーダーシップを取っていく子たちがさらに増えると思います。学生たちは、よい考えを持っているのに言わないのです。自信がないのです。そのため、自信を付けてほしい、間違ってもよいから、自分はこれがよいと思うことを発言できるような子になるとよいと思っています。大学では非常にリッチな学びが幾らでもできるので、そのような形を探究に期待したいと思っています。

もう一つ、学生たち、特に関大生を見ていて思うのですが、先ほどのテーマでも将来のことがありましたが、少し早過ぎるキャリア教育がとても気になっています。みんな入学時点で、どの職業やどの職種に行かなければならないであったり「私、何も決めていないんです」と言ったりしているのです。なぜ、そのように早くなったのだろう。今はどの職種やどの職業などは要らない、ただ、どのようなところで自分が働きたいのか、どのようなところで自分は価値を見出したいのかというところまでをしてほしいです。見ていて、非常にかわいそうで、窮屈な感じがしています。そのキャリアの問題も、少し気になっています。

組織の問題も、まだまだ話をしたいのですが、これくらいにしたいと思います。課題をたくさん考えさせられました。とても楽しい時間を、本当にありがとうございました。

滋野: どうもありがとうございました。私も、とても勉強になりました。2022年度から、高等学校では新しい学習指導要領が完全実施になります。このフォーラムをきっかけに、それぞれの学校での取り組みがさらに活発になりましたら、大変幸いに存じます。

本日は、皆さん、お忙しい中、本当にありがとうございました。

